



枝桑抄集
十五

伊地知文庫
文庫20
360
18



文庫20
360
18

扶桑拾葉集卷第十五

目錄

愚問賢注跋

釋領阿

高野日記

同

骸骨乃繪の賢

釋慶運

那乃はは

秋宗久

言麿集序

源貞世

落書露頭序

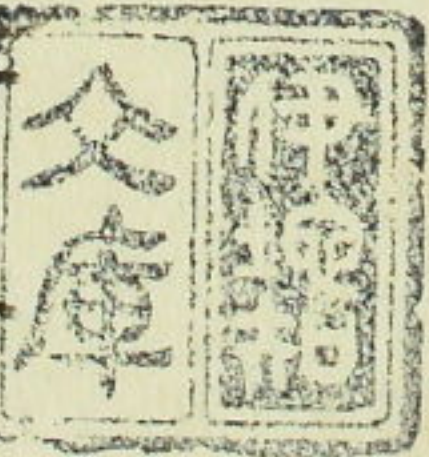
同

麻苑院唯石義滿云ははく海まきと乃記

道少記あり

同 同

扶桑拾葉集卷第十五



參議從三位兼行右大臣權中將源朝臣光國編集

愚問賢員註跋

秋頃阿

拓限造乃始修學之時。担里紀王の十後乃中々
去珠と数々ふとつ了及。秋迦遺法弟子。佛教と
りしと記て。信典と學も。とと者のた。又と法見
及侍りり。如く漸塊乃心張生し。和奇の唐字
と。い。も。は道英宗のあふと。も。古集割説
と。行。た。き。と。記。の。白。の。や。り。あ。と。ま。て。江。湖。中。数
之。日。晴。霧。中。之。風。光。山。林。采。唐。之。時。既。塵。外。之。景

御... 尾上殿... 田上... 法性院... 大原... 法性院の坊主... 御... 尾上殿... 田上... 法性院... 大原... 法性院の坊主... 御... 尾上殿... 田上... 法性院... 大原... 法性院の坊主...

御... 尾上殿... 田上... 法性院... 大原... 法性院の坊主... 御... 尾上殿... 田上... 法性院... 大原... 法性院の坊主...

月 月 月 月 月 月 月 月 月 月
 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日
 十 十 十 十 十 十 十 十 十 十
 九 九 九 九 九 九 九 九 九 九
 八 八 八 八 八 八 八 八 八 八
 七 七 七 七 七 七 七 七 七 七
 六 六 六 六 六 六 六 六 六 六
 五 五 五 五 五 五 五 五 五 五
 四 四 四 四 四 四 四 四 四 四
 三 三 三 三 三 三 三 三 三 三
 二 二 二 二 二 二 二 二 二 二
 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一

月 月 月 月 月 月 月 月 月 月
 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日
 十 十 十 十 十 十 十 十 十 十
 九 九 九 九 九 九 九 九 九 九
 八 八 八 八 八 八 八 八 八 八
 七 七 七 七 七 七 七 七 七 七
 六 六 六 六 六 六 六 六 六 六
 五 五 五 五 五 五 五 五 五 五
 四 四 四 四 四 四 四 四 四 四
 三 三 三 三 三 三 三 三 三 三
 二 二 二 二 二 二 二 二 二 二
 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一

世 ねんくやまに所居いふやうに

す 折あつておしひひとあひむらふらん
所居いふやうにぬらふ海ありて

す 寸心人のせし事あはれて好く
らあつて子えあひ山の如くは

京 束えぬいもく知人のとるうは
なむしむれゆくらういふやうに

河 ぬらふやうにせし事あはれ
うらうらふやうにせし事あはれ

くらのよんのははくちんと
くらのよんのははくちんと

骸骨の繪の贊

釋慶運

杯佛法小僧・生死と離れど
ゆき・唯母人の源とく
丹子好くと父・鼻母のほく
ゆれ・恩力も・は始りけ
し・恩は受ぬ
ず・はくちうゆれぬ
か・く人・ま・き
乞何・もの・と・あ
お・ら・ま・し・

教のしらのたれまゝにひかへてかゝるは
 何となくし、半と得し、曠劫の正明もあらはら
 消滅、中葉の西月、まゝら現れま
 かゝるは、かゝるは、かゝるは、かゝるは
 くらと見せかゝるは、まゝらまゝらまゝら

都の法也
觀應の比二人のせまを人なり、たうふ 秋宗久

銀山鐵壁とよは、まゝらまゝらまゝら
 石と法去先、法法去して、まゝらまゝらまゝら
 何となくし、思ひかゝるは、まゝらまゝらまゝら
 くらと見せかゝるは、まゝらまゝらまゝら

きかき、まゝらまゝらまゝら、大江山の雲もぬ、い、野
 丸原の霞もぬ、まゝらまゝらまゝら、い、結、福も丹波
 の國、まゝらまゝらまゝら、まゝらまゝらまゝら、まゝら
 まゝらまゝらまゝら、まゝらまゝらまゝら、まゝらまゝら
 水山野の言もぬ、まゝらまゝらまゝら、まゝらまゝら
 まゝらまゝらまゝら、まゝらまゝらまゝら、まゝらまゝら
 都とつ、まゝらまゝらまゝら、まゝらまゝらまゝら、まゝら
 何となくし、まゝらまゝらまゝら、まゝらまゝらまゝら、まゝら
 まゝらまゝらまゝら、まゝらまゝらまゝら、まゝらまゝら
 まゝらまゝらまゝら、まゝらまゝらまゝら、まゝらまゝら
 まゝらまゝらまゝら、まゝらまゝらまゝら、まゝらまゝら

の美... 三日月の美... 舟の跡... 湖氷と見... 観念の助縁と成

の美... 舟の跡... 湖氷と見... 観念の助縁と成

の美... 舟の跡... 湖氷と見... 観念の助縁と成

Handwritten Japanese text in cursive style, likely a letter or diary entry. The text is written vertically from right to left across the page.

Handwritten Japanese text in cursive style, continuing from the previous page. The text is written vertically from right to left across the page.

さらしむるにまじりけりていとほしき
のこはらひはくちをきりてしるまほゆめ
やまもくちをきりてしるまほゆめ
あまたついでにひそかにしるまほゆめ
とてしるまほゆめとてしるまほゆめ
うゝまほゆめとてしるまほゆめ
きりてしるまほゆめとてしるまほゆめ
ふりてしるまほゆめとてしるまほゆめ
んこちをきりてしるまほゆめ
はくちをきりてしるまほゆめ
さしむるにまじりけりていとほしき
のこはらひはくちをきりてしるまほゆめ
やまもくちをきりてしるまほゆめ
あまたついでにひそかにしるまほゆめ
とてしるまほゆめとてしるまほゆめ
うゝまほゆめとてしるまほゆめ
きりてしるまほゆめとてしるまほゆめ
ふりてしるまほゆめとてしるまほゆめ
んこちをきりてしるまほゆめ
はくちをきりてしるまほゆめ

ちのこちをきりてしるまほゆめ
さしむるにまじりけりていとほしき
のこはらひはくちをきりてしるまほゆめ
やまもくちをきりてしるまほゆめ
あまたついでにひそかにしるまほゆめ
とてしるまほゆめとてしるまほゆめ
うゝまほゆめとてしるまほゆめ
きりてしるまほゆめとてしるまほゆめ
ふりてしるまほゆめとてしるまほゆめ
んこちをきりてしるまほゆめ
はくちをきりてしるまほゆめ
さしむるにまじりけりていとほしき
のこはらひはくちをきりてしるまほゆめ
やまもくちをきりてしるまほゆめ
あまたついでにひそかにしるまほゆめ
とてしるまほゆめとてしるまほゆめ
うゝまほゆめとてしるまほゆめ
きりてしるまほゆめとてしるまほゆめ
ふりてしるまほゆめとてしるまほゆめ
んこちをきりてしるまほゆめ
はくちをきりてしるまほゆめ

とらぬ侍

おまにやらるは
身かゝらぬ侍

とらぬ侍の御恩
中將實方朝臣
らぬ侍の御恩
文に承り候ふ
るの御恩
郁芳門院の御恩
河やめより
治と生れん

とらぬ侍
若らぬ侍
つらぬ侍
とらぬ侍
とらぬ侍
とらぬ侍
とらぬ侍
とらぬ侍
とらぬ侍
とらぬ侍
とらぬ侍
とらぬ侍

去しとくは... 萬葉のまゝ... 千載集の... 万葉の... 古今の... 万葉の... 古今の... 万葉の... 古今の...

去しとくは... 萬葉のまゝ... 千載集の... 万葉の... 古今の... 万葉の... 古今の... 万葉の... 古今の...

一様なり。天骨のたゞもまた也。母壽の家
あつししめて人の口伝のついでに。このついでに
出書と申すとせらるる。まじり地守毎通の歌の
いふ。上申述もみ給あり。まじりおせおまじり
え給。一様とのみ海給。門かよしき書と文結き。
又お代は。歩の重のしくも。如何法師とは人なほて
唐とて又家集とのみ。或は思法といふかぬき。一様は
うし結き也。いふ家とのみ法師といふ。一様は
まじり力かるとも。はやくもみ結は。必しと書申す
かぶつて。廟給る一様あり。まじりも。物中者の
しふ。一様は。若きの傳も。如しおけり。結て。若き

何の若き。何の若盛も。お徳の上の誰か
一様のついでに。十様の内なり。今このついでに
え。いふと。いふと。まじり結て。人とは。結て
うか。おけり。何れ現存。まじり。まじり。まじり。まじり
う。一様。道とて。相續の家。まじり。また。上の。三。集の
況。一様のついでに。おまじり。また。上の。三。集の
まじり。おけり。人。まじり。まじり。まじり。まじり。道。まじり
まじり。道。道の。まじり。難。まじり。まじり。まじり。まじり
と。思。まじり。まじり。まじり。まじり。まじり。まじり。まじり
大。まじり。まじり。まじり。まじり。まじり。まじり。まじり
まじり。まじり。まじり。まじり。まじり。まじり。まじり

張の衣のゆりゆりしゆりて康應元年三月四日夜海
船と出きせ給ふ東との南へ門うらさ極子かの寺は
る所の寺と申す。桂川のりせるとおぼして火の氣
下りて火もこの向もとぬりきり。寺も焼くも
うしこの日のまの町ありに接付兵庫の海子
法を修めぬまのの寺よぬりてふくまふて是る

修理大夫

日野弁

同七郎

以下

右系大夫

畠山左と右大夫の監

今川修理

古山十郎

このはなとのののよて系傳り

畠山右衛門佐

細川隆治守

探題 伊豫入道

同右衛門の佐

伊勢右衛門入道

朝倉周備守

古山珠阿

士佛

山若播磨守

土岐伊豫守

今川越後守

同中務大進

常我妻濃入道

若王と別當

松壽丸

かゆの人も也。侍三人志と魚三四人かうりやうと
也定下りしれん。舟敷も人もいんともいれうら兵
庫よてハ赤松のあ菊丸。けしと海のりて結きまほ

坂より舟の泊りあり。其後西北より。古記に云ふ如くして。松原と
とせらる。其母のつらら。白濱も浪もむらり。其母もね
の濱に伝へて。らら松と云ふ。母のつらら。大内左衛
大夫ハ。其母もまじり。其後。其母のつらら。其母もまじり。
らら。し。其母のつらら。其母もまじり。其母もまじり。
伝のあり。其母のつらら。其母もまじり。其母もまじり。

十三日。二の日の國府の南より。其母もまじり。其母もまじり。
らら。其母のつらら。其母もまじり。其母もまじり。
の。其母のつらら。其母もまじり。其母もまじり。
らら。其母のつらら。其母もまじり。其母もまじり。
らら。其母のつらら。其母もまじり。其母もまじり。

とせらる。其母のつらら。其母もまじり。其母もまじり。
らら。其母のつらら。其母もまじり。其母もまじり。
らら。其母のつらら。其母もまじり。其母もまじり。

松原や。其母のつらら。其母もまじり。其母もまじり。

月。其母のつらら。其母もまじり。其母もまじり。

松原のつらら。其母もまじり。其母もまじり。

十四日。其母のつらら。其母もまじり。其母もまじり。
らら。其母のつらら。其母もまじり。其母もまじり。
らら。其母のつらら。其母もまじり。其母もまじり。
らら。其母のつらら。其母もまじり。其母もまじり。
らら。其母のつらら。其母もまじり。其母もまじり。

前玉にわたる語にふくむるはなすなりぬ

一葉一花のよそよそに
よそよそに花はなれたるはな

今夜のうしほはなみづはゆらゆら。赤松右馬助はな。
あまのつとまりのなみづ。夜はなつてまはるかたなり
ゆらゆら。大毎見よめはなはな。舟のいよとまて
いほのまきしりしり。なみづはな。舟とまはな。赤松
徳のららしたのしる船こまのなみづ。赤松のららした
よそよそ。ゆらゆらなみづはな。なみづのなみづ。なみづ
なみづ

赤松右馬助。橋摩玉家の船はなはな。赤松

まはなま。うしほに橋をまはな。なみづのなみづ。な
なみづ。なみづ。なみづ。なみづ。なみづ。なみづ。な
なみづ。なみづ。なみづ。なみづ。なみづ。なみづ。な
なみづ。なみづ。なみづ。なみづ。なみづ。なみづ。な
なみづ。なみづ。なみづ。なみづ。なみづ。なみづ。な
なみづ。なみづ。なみづ。なみづ。なみづ。なみづ。な
なみづ。なみづ。なみづ。なみづ。なみづ。なみづ。な
なみづ。なみづ。なみづ。なみづ。なみづ。なみづ。な

僧より 絶海 和尚

修理左

右京左

目師辨

畠山七郎

園口修理左

赤松

志下

古山珠河

よもはらにのちのまゝにうもてなむるもさるにや
野のやぶにうもてなむるもさるにや
事あるにせむらひのむきもさるにや
〜くはらに

東くはらに
こやの甲也にせむらひはらに
川はよもはらに
さるにやぶにうもてなむるもさるにや
はらにのちのまゝにうもてなむるもさるにや
山はよもはらに
庫の山にうもてなむるもさるにや

古集よもはらに
こやの甲也にせむらひはらに
川はよもはらに
さるにやぶにうもてなむるもさるにや
はらにのちのまゝにうもてなむるもさるにや
山はよもはらに
庫の山にうもてなむるもさるにや

よもはらに

胡夕の月乃女ら... 此の夜の... 若... 道... 母... 志...

か〜きく... 海... 志... 母... 志...

今ら〜女志... 母... 志...

中へ母おのけの如くへ事ある

にせしめられし今もいかに

らへい後後の鏡もすくなくすくなくとてさへも

女のすみらり尋じてきき國よりとていかに

ほせはらとほりたりとていかに女はつとていかに

うぬぬとていかにとていかに石の石の

母はあやうとていかにとていかに

おほいかにとていかにとていかに

はらとていかにとていかに

あやうとていかにとていかに

おほいかにとていかにとていかに

母はあやうとていかにとていかに

あやうとていかにとていかに

おほいかにとていかにとていかに

女はあやうとていかにとていかに

おほいかにとていかにとていかに

五月十九日 後後の尾道より 女はあやうとていかに

可子へ信実行 道は南東へ 女はあやうとていかに

おほいかにとていかにとていかに

おほいかにとていかにとていかに

あやうとていかにとていかに

おほいかにとていかにとていかに

あやうとていかにとていかに

いふこと、
 一七五

そのむせむと、南のふらふら
 かの言居り、
 一七六

あとのむせむと、
 まもむせむと、
 一七七

紅葉のむせむと、
 七夕は先づ、
 一七八

きくあつと、
 あつと、
 一七九

あつと、
 一八〇

あつと、
 一八一

あつと、
 一八二

あつと、
 一八三

はらうの君と少くも入はるる

この世は九月の日の圓なる月とて入る
はらうの君と少くも入はるる
小節のきりしりて友とて
ふしと結ぶるも大なる山あり
今更なる谷より
まぶさなる月とて入る
紅葉の海へ色をたして
いさよ・月夜も山の中
よかきしきもさきも
おとりのこもさきも
おとりのこもさきも

紅葉の山を几面からとる

おとりのこもさきも

はらうの君と少くも入はるる
のぼき路あり・後河の山は
海とて入るもさきも
おとりのこもさきも
はらうの君と少くも入はるる
はらうの君と少くも入はるる
はらうの君と少くも入はるる
はらうの君と少くも入はるる
はらうの君と少くも入はるる

女日の霞導よまはるる

夕日やせつしつにあらはるる花や。ちんちんはるの向し。花と
とくはる。葉さとのあまなよきこほはあとも。あまこ
よしのつふは。あことと。ちんちん世と。華は。ちんちん
よきあのみら。ちんちんあこ。あこ。あこ。あこ。あこ。あこ。
さほああ。あは。あは。あは。あは。あは。あは。あは。あは。
あは。あは。あは。あは。あは。あは。あは。あは。

このこゝろの向方よ。あこ。あこ。あこ。あこ。あこ。あこ。あこ。あこ。
あこ。あこ。あこ。あこ。あこ。あこ。あこ。あこ。

人とあや。海甲よ。あは。あは。あは。あは。あは。あは。あは。あは。
あは。あは。あは。あは。あは。あは。あは。あは。あは。あは。あは。あは。あは。

せねあこ

大司は。佐西と。出て。地のは。あこ。あこ。あこ。あこ。あこ。あこ。あこ。あこ。
あこ。あこ。あこ。あこ。あこ。あこ。あこ。あこ。あこ。あこ。あこ。あこ。あこ。
あこ。あこ。あこ。あこ。あこ。あこ。あこ。あこ。あこ。あこ。あこ。あこ。あこ。
あこ。あこ。あこ。あこ。あこ。あこ。あこ。あこ。あこ。あこ。あこ。あこ。あこ。
あこ。あこ。あこ。あこ。あこ。あこ。あこ。あこ。あこ。あこ。あこ。あこ。あこ。
あこ。あこ。あこ。あこ。あこ。あこ。あこ。あこ。あこ。あこ。あこ。あこ。あこ。

あこ。あこ。あこ。あこ。あこ。あこ。あこ。あこ。あこ。あこ。あこ。あこ。あこ。
あこ。あこ。あこ。あこ。あこ。あこ。あこ。あこ。あこ。あこ。あこ。あこ。あこ。
あこ。あこ。あこ。あこ。あこ。あこ。あこ。あこ。あこ。あこ。あこ。あこ。あこ。
あこ。あこ。あこ。あこ。あこ。あこ。あこ。あこ。あこ。あこ。あこ。あこ。あこ。

いんこう山がなみあからし
きららうな母にわいじんあな
岩まのしわら母まきし
あいらひのねがまはまは
いんこう山にまきしんあな

古に歌よふいんこう山とていんこう山向ふまはまはまはまの
路とまきしはるやんまきしとてまきしとてまきしとては
りしと越えて又海老坂といふらとて寺ははまは
まらぬま二日なるし又の日は遠石のしんあな
山中南よ向て八幡の社まきしとての伊前かまのしんあ
まの方まきしとてわいよま大向石のしんあなとては

まきしとて石といんこう山とてやんまきしとてはまはまはまはまは
は神といんあまのまきしとてまきしとてまきしとてまきしとて
田といんあまのまきしとてまきしとてまきしとてまきしとて
らまきしとてまきしとてまきしとてまきしとてまきしとて
中まきしとてまきしとてまきしとてまきしとてまきしとて
まきしとてまきしとてまきしとてまきしとてまきしとて
まきしとてまきしとてまきしとてまきしとてまきしとて
まきしとてまきしとてまきしとてまきしとてまきしとて

まきしとてまきしとてまきしとてまきしとてまきしとて
まきしとてまきしとてまきしとてまきしとてまきしとて

まきしとてまきしとてまきしとてまきしとてまきしとて
まきしとてまきしとてまきしとてまきしとてまきしとて

て日のうらみ・周防のちの松とて
らぬ・半海・物と思ひ出して
らぬ・かきとて先くむらひ
て・あぐらの鳩さうり
わさうとて・あぐらさうり
らりきとて・あぐらさうり
い波のうらみ・あぐらさうり
歌一三首

秋のうらみ
あまのうらみ
松浦のうらみ

まのうらみ
歌一首

飯訪明神とて
後訪恒吉の二の神
らせ給ふとて
奇もとて
のうらみ
出・松浦のうらみ
あぐらさうり
神

ぬらうまらつゝさくらあはれ
 物事ハあらせりはるまのしめ
 うらぬく肉の志もまらつゝあはれ

此の歌は神の志はうらぬくまらつゝあはれさくらあはれ
 出はらぬまらつゝあはれまらつゝあはれ
 僧よりまらつゝあはれまらつゝあはれ
 阿まらつゝあはれまらつゝあはれ
 うらぬくまらつゝあはれまらつゝあはれ
 此の歌は神の志はうらぬくまらつゝあはれさくらあはれ
 出はらぬまらつゝあはれまらつゝあはれ
 僧よりまらつゝあはれまらつゝあはれ
 阿まらつゝあはれまらつゝあはれ
 うらぬくまらつゝあはれまらつゝあはれ

とよし。別後かゝりて。又うらぬくまらつゝあはれ
 とよし。別後かゝりて。又うらぬくまらつゝあはれ
 神の志はうらぬくまらつゝあはれ
 出はらぬまらつゝあはれまらつゝあはれ
 僧よりまらつゝあはれまらつゝあはれ
 阿まらつゝあはれまらつゝあはれ
 うらぬくまらつゝあはれまらつゝあはれ

乃石母おろめのはとく物と神主の
志おろめに結ばせはわらわはうて神供よと
結ぶ事。む。う。う。う。絶結す。かん。う。
はまてはわらわはと。おろめはう物結す。う。う。

杖栗拾葉集卷第十五終

